



おしゃれな看板が越喜来湾によく映える三陸鉄道「恋し浜駅」



発行
岩手県沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター
〒022-8502
岩手県大船渡市猪町町字前田6-1
TEL.0192-27-9911
FAX.0192-27-1395
<http://www.pref.iwate.jp/info.rbz?nd=77&ik=3>



※気仙新聞第八号は「食と観光」をテーマにお届けいたします。「気仙」という言葉が正史『日本後記』に登場して今年で千二百年。その歴史は日本で最大・最古といわれるこの地の「三面椿」のよう、リアスの風土の中で静かに力強く時を刻んできました。訪れなければ体感できないこの地の「風と光」をこの紙面から感じていただき、気仙に足を運んでいただくきっかけになれば幸いです。

三陸海岸「恋し浜」に吹く爽やかな風

大船渡市三陸町綾里(りょうり)の小石浜地区。全世帯で三十戸ほどのこの地区は、そのほとんどが漁家です。ここを通る三陸鉄道・南リアス線の「恋し浜駅」は今、パワースポットとして注目を集めています。駅を訪ねてみると待合室にはたくさんの「ホタテ」の絵馬が奉納されていました。どんな経緯でホタテの絵馬が飾られるようになったのでしょうか。

若い漁師たちの挑戦

小石浜の養殖ホタテが築地市場で一キロあたり一、〇五〇円という最高値を記録したのは昭和六十三年のこと。しかしその後価格は低迷。そんな苦境を自分たちの工夫と努力で打破しようと立ち上がったのが三陸町綾里の綾里漁協小石浜青年部の若者たちでした。

小石浜は親潮と黒潮が出合う三陸沖を控え、ミネラル豊富な海水に恵まれたホタテの生育に好条件の立地。それに加え、エサとなるプランクトンを充分に摂取できるよう貝殻に付着する海藻などの雑物を丁寧に除去するなど、出荷するまでにかなりの手間をかけています。こうして育てられたホタテは身が厚く、旨味や甘味の強い「自慢のホタテ」なのです。

ところがホタテは、県漁連が共販品制度で取り扱う水産物のため、品質に差があっても出荷の値段は同じ。



駅の待合室は奉納された絵馬でいっぱい(無料の奉納用ホタテ貝が待合室に用意されています)



出荷のホタテを前に小石浜青年部のみなさん



「恋し浜ホタテ」はイベントでいつも大人気

三陸鉄道「恋し浜駅」へのアクセス
三陸鉄道南リアス線・盛岡からおよそ20分
<http://www.sanrikutetsudou.com/>
三陸鉄道南リアス線 0192-27-9669

YouTubeで 気仙新聞 検索



気仙新聞のバックナンバーを
下記のURLで見ることができます。
http://www.epix.co.jp/kesen_s.html

ブランド化の夢が実現

平成二十年、小石浜青年部は「恋し浜」というブランド名を商標登録しました。この名は、昭和六十年に小石浜駅が請願駅として誕生したときに、青年部発足のメンバー佐々木亨さんの祖父、故惣一郎さんが詠んだ短歌に由来します。

三鉄の藍(愛)の磯辺の小石(恋し)浜
かもめとまりて 汐風あまし

今、この短歌に詠まれた「恋し浜」は地元産ホタテのブランド名に使われ、さ

ホタテ貝のパワースポット

そこでは考えたのが生産者から消費者へ直接お届けする直販システム。綾里漁協の協力を得て漁協が買受人登録し、浜から消費者へ直送するシステムを確立したのです。このため、生産者からは漁協がホタテを高値で買い受け、消費者へは安く提供できるようになったのです。



恋し浜ホタテBURGERあります！

大船渡市盛町のショッピングモール「サン・リア」一階にあるハンバーガーショップ「THE BURGER HEARTS」はびっくりするほどメニューが多彩。なかに、恋し浜ホタテの貝柱とヒモも使った「恋し浜ホタテBURGER」があります。

ホタテを食べることを実感してもらうために分厚い身をそのままクリムコロッケにし、タルタルソースをかけて自家製パンで挟んでいます。野菜は地元産を使うなどこだわりの逸品。開発には店主の菊池亮さんが一ヶ月くらい試行錯誤したとか。形は、パンズを貝殻に見立てたホタテそのもの。毎日五十食限定で販売中。このこだわりとボリュームで五〇〇円はリーズナブル。

THE BURGER HEARTS
電話0192-27-5136
三陸鉄道南リアス線盛岡から徒歩3分
営業時間/AM10:00~PM8:00

「恋し浜ホタテ」を即売

左記のイベント会場で綾里漁協小石浜青年部が「恋し浜ホタテ」を出店即売いたします。お近くの方はぜひお出でください。

◆山形県「最上町産業祭り」
(十月三十一日)

◆長野県「佐久市農業祭り」
(十一月十三日)

論説 気仙郡誕生千二百年に当って

元「東海新報」編集長 鈴木 周二

今年「気仙郡」という古代律令国家をかたちづくる郡名が初めて正史に登場して、ちょうど千二百年に当たることから、気仙二市一町（大船渡市・陸前高田市・住田町）ではさまざまな記念イベントを企画しているようだ。

の域を出ない（注 気仙郡の建置を巡る諸説の概略については、筆者の個人通信誌『評論 地域』第二号「二〇一〇年八月」に執筆しているので詳細は割愛する）。気仙郡の建置について考えるとき、少なくとも三つの不明な点が即座に浮かび上がる。

一つは、前述したように明確にいつ郡として成立したのか、判断としないこと。

二つ目は、気仙郡の区域（範囲）が、どこからどこまでなのか分からないこと（郡というからには、どこかに郡役所が置かれ、郡司が任命・配置されていた筈であるが、これも判然としない）。

三つ目は、古代史の調査研究には、文献史料とともに考古学的視点からのアプローチが欠かせないが、気仙郡の建置を巡ってはこれまで後者についての要素が殆んど希薄であったこと。しかし最近になって、ようやく陸前高田市高田町の小泉遺跡から、律令制の郡役所の存在を推測させる「厨（くりや）」の銘のある墨書土器が出土したところによって、今後調査研究の進展が期待され

る。

私には一理ある論だと思えるのだが、果たしてどうだろう。

いずれにしても気仙郡の成立時期と、その郡域を見きわめることは気仙の歴史学上大きな課題の一つであり、今後はぜひいい観点からの調査や考察が求められると言えそう。

1963年県立金石高校卒業後、気仙地区をエリアに発行する「東海新報」に入社。1982年から17年間編集長を務める。04年に一線を退くまで41年の記者生活を踏まえ、10年5月、地域の政治や文化、歴史などの分野で、将来のあるべき姿の指針になるよう提言していく、個人通信誌『評論 地域』創刊（年4回発行）。編著書多数。1944年大船渡市生まれ。

鈴木周二

三陸の真髄にふれる体験を提供したくて

三陸まるごと体験館 熊谷満恵さん

世の中には今や「体験型旅行」があふれています。その内容やコンセプトはさまざま。そんななか「ここに来た人に地域の風土を体験してもらいたい」と孤軍で奮起し、体験施設を立ち上げた女性がいます。その名もずばり「三陸まるごと体験館」。

その活動をご紹介します。



地元産の新鮮な食材は和やかなつといを演出する陰の主役



毎日が楽しいという熊谷さん



生まれて初めてのホタテの殻むき体験は夏休みの良い思い出



今まさに「三陸まるごと体験中」



理想的な「体験」を追求

三陸鉄道南リアス線の中間地点にある大船渡市三陸町越喜来（おきらい）。少し高いところにある三陸駅のホームからは海を望み、駅を出ればのどかな風景に出合います。駅周辺は肥ノ田地区といって小枝柿発祥の地。秋には駅のホームに干し柿のスタレができ、甘くなると三鉄の乗客に振舞われます。

この駅から数分のところに、三陸の食や文化を体験できる「三陸まるごと体験館」が誕生しました。地元の郷土料理を作って食べたり、ホタテやカキの殻むき、魚介類の燻製づくりなどさまざまな体験ができる施設です。

運営するのは熊谷満恵さん。三陸町内で生まれ育ち、地元を愛してやまない人のひとり。

「碓石海岸には碓石海岸の魅力がありますが、このあたりには「普段着」の海の魅力があります」と話す熊谷さん。三陸らしい美しい海辺の景観や浜の作業風景をほどこい範囲の中で見ることが出来るこの地は、観光の拠点にふさわしいと胸を張ります。

大船渡市の臨時職員や市観光協会職員として三陸駅勤務などを経験してきた熊谷さんは、二十代のころすでに地域づくりにについて考え、様々なセミナーに参加してきたと

か。

大切なのは風土の体感

体験館は白壁と焼き杉のコントラストが美しい古民家風の建物。中に入ると、石のたたきと広い板場があり、まるであつらえたかのような雰囲気。実は既存の建物を、お向かいにある「三陸とれたて市場」（三陸の海の幸をネット販売する企業。気仙新聞第四号で紹介しています）と共同借用しているものです。館内には「三陸とれたて市場」のメンバー手づくりのカマドや炬も設置され、いつでも新鮮な魚介が調理できるようなっています。

「来たお客さんには、もつとこの地域を感じてほしい。それにはやはり『体験』が

夫婦それぞれの趣味を楽しむ暮らし

野村節三さん・美保さん

野村節三さん夫妻は三陸町居住歴三十五年の「ベテラン」。移住のきっかけは仕事でした。東京で抗生物質などの研究をしていた節三さんが、米留学から帰国して仕事を探していたところ三陸町の北



里大学が見つけたの。 「大学の同僚に、あそこは日本のチベットだぞと冷やかされたことが好きでしたし、海に憧れていたので…」

必要だと思のです。ホタテの殻むき作業ひとつでも、地元のおばさんと一緒に体験すれば三陸の風を感じて三陸のファンになります。」という熊谷さん。

三陸町は「キッピーンアワビ」の里でも有名ですが、個人客が気軽に三陸のアワビを食べられる食堂がないのが現状で、郷土料理も同様。民宿で味わうことができるにしても、宿泊しない人は味わうことができません。そんな旅行者がふらっと立ち寄って、地場の魚介を味わいながら、地元の人と会話が楽しめるような場が必要なのだと。

「旅行者だけでなく、地元の人に体験してほしいこともたくさんあります。かつては郷土料理などもお手伝いをするうちに覚えてきていますし、ここですぐいうものも伝えていきたいですね」と夢は広がります。

自身の体験を活かして

自分が経験してみないと、来たお客さんが何に感動してくれるのか想像できません。だから、ときには自分が旅行者になり、その経験を活かしているのだとか。

飛騨高山で食べたシンプルなお醤油団子の味。とても印象深いその味とともに、売っていたおじさんは今でも元気なのだろうかとその姿を思い起こす。心に映ったそんな出会いにそんな楽しみを提供できればと満恵さんは目を輝かせます。

それだけに、スタッフの配置にも工夫を重ねていく。最近では「年配者が主役」というほど年配者の力を借りているそうです。七十代には七十代の、八十代には八十



離れの1階は研究室、2階はアトリエ

と野村さん。 野村さんと同じ兵庫の出身で、東京の職場でも一緒だった奥さんの美保さんは、自分のことよりも、学校は近くにあるか、うまくやっていけるかと子どものことが心配だったそうです。 移住してからは、野村さんは趣味の廃坑めぐりや海や溪流での釣りを楽しみ、「宮沢賢治のいうとおりの理想郷。いうことないですね」とご満悦。美保さんも「景色がよくて趣味の絵画の題材がたくさんあります」とにっこり。

移住前に築いた自分たちのライフスタイルも保ちながら、地域とも交わり、野村さんが退官された現在、夫婦そろって存分に三陸の生活を堪能しています。

代々の蓄積されてきた人間力があり、そんな年配者を熊谷さんは「宝」だといいます。 「私たちは、ばあちゃんたちの手先のようなもの」と話す目には、人生の先輩への敬意があふれていました。

満恵さんは、自身が取り組んでいることを「三陸町のファンを増やす事業」と位置づけています。「ここにも観光客が来るようになれば、三陸鉄道の利用も増えると思うのですよ」と、地元三陸鉄道との共栄までしっかりと考えています。

地元のものを見つめ直して、その価値をきちんと位置づけ、誇りを持つこと。この地を訪れた人にとって何が感動的かをよく考えること。そしてそれらを伝える工夫や努力をすること。その様な姿勢でこの体験館を訪れた人たちとふれ合ってゆけば、きっと来館者に伝わるものがあるはずだと考えています。

そしてなによりも大好きなふるさと・三陸の素晴らしさを伝えることが楽しくてしようがないという満恵さん。満恵さんの指導でホタテ貝の殻むき体験をした子どもたちが、「お母さん、ボク帰りたいくない！」と何度も言うのは、きっと満恵さんの思いがしっかりと子どもたちにも伝わっているからなのでしょう。

※三陸まるごと体験館では事前に予約して食事や体験をすることが出来ます。三陸鉄道南リアス線を使えば「恋し浜駅周辺探訪」や盛駅前の「恋し浜ホタテ田舎の里」を同時に楽しむことが出来ますので、三陸鉄道のホームペー上で時刻を確認ください。

三陸まるごと体験館
電話〇九〇六二五三二二七三
三陸鉄道南リアス線「三陸駅」
下車徒歩5分
<http://www.sanrikutsudou.com/>

気仙の「伝承人」探訪

名案内で堪能する 気仙大工の技

暮らしを支えるための出稼ぎから発祥した

ハイレベルな気仙の大工・左官集団。その卓越した技術は、その背景にある日々の暮らしや精神論、地域の風土とともに伝えていかなければならないものです。気仙大工・左官伝承館の管理人・黄川田巳之助（きかわだ みのおけ）さんは、八十年に及ぶ人生経験から、気仙の魅力を存分に伝えてくれる名案内人です。



黄川田さんが炉端に座ると語り部になる



明治初期の気仙の民家を伝える伝承館



ユーマアを交えた黄川田さんの話は心地いい



驚くほどたくさんの大工や左官の道具類

YouTubeで 気仙新聞 検索

暮らしを支えた大工技術

気仙地方が誇る伝統文化のひとつに気仙大工があります。発祥の地といわれる陸前高田市小友町は、そのむかし農業だけでなく漁業だけでも生活が成り立たなかった地域でした。そのため農民が大工として出稼ぎに行き、次第に集団を形成するようになっていって行きます。気仙大工という呼称は江戸時代に発生したと考えられていますが、出稼ぎの仕事がなぜ大工だったのかなどの詳しい事情は明らかにされていません。ただ、気仙大工は本来「家大工」でありながら、社寺なども手がけるほど高い技術を持っていたことはよく知られています。

その小友町の箱根山中腹に気仙大工の技を今に伝える「気仙大工・左官伝承館」があります。明治初期の気仙の民家をモデルにした茅葺屋根の家屋と白壁の蔵が建てられ、かつての民家を体感したり大工道具などを見ることが出来ます。

知識豊富な話に魅せられて

思わず足を止めてしまうほどの荘厳さと美しさを併せ持つ家屋の玄関から中に入るとそこには炉端と台所があります。広い土間の右奥には竈（かまど）があり、大きな竈神さまが大きな目を見開いて見守っています。炉端では茅葺の屋根を守るために毎日火が焚かれているとか。

「ほら、一段低くなっているでしょ。これが『下がり縁』というものです。敷居を境にして、血縁の人はどうぞ中へお入りください、血縁でない人はここから外にいてください、ということになるのです。『敷居が高い』というのはここからきているのです」

地元ケセン語で説明してくれるのは黄川田巳之助さんです。平成四年の同館開館当時からずっと管理人を任せられています。穏やかな語り口とユーマアを交えたお話は、ずっと聞いていたくなる心地よさ。

「炉端」の話だけでも黄川田さんの話は豊富です。この炉の自在鉤は「一文字鉤（いちもんじかぎ）」といわれる意匠であること、材料にはおめでたい「松・

竹・梅」が使われていて「末（松）代かけて煮て食わせ申そう（孟宗・竹の種類）」という意味があること。火のある炉の上には「火消しの木」といわれる「ミズキ」が使われていることなど、むかしの人の暮らしや思いが伝わってきます。

黄川田さんは、管理人になるまで長く半農半漁の生活をしてきたそうですが、建築の知識も豊富です。それもそのはず、むかしは家を建てるのに隣近所、親戚、みんなで手伝ったもので、黄川田さんも材料を運んだり、屋根に上って釘を打ったり、古家下（ふるやさげ）古い家を壊すことなどをしたりと、大工仕事を手伝ったのだそうです。

そんな経験のなかで見たこと、大工さんから直接教えられたことなどが材料なので、お話は臨場感にあふれています。

古きよき精神教育

管理人になった現在、漁業はやめたそうですが農業は続けているという黄川田さんの一日は、農作業から始まります。

朝四時に起きて農作業をしてから、八時三十分には伝承館に出動。雨戸を開けて炉に火を入れ、九時の開館から四時の閉館までの間はお客様の対応をしたり、生垣を整枝したり草取りをしたりと休む間がありません。閉館すると家に戻り、明るいうちはまた農作業。とにかくよく働きます。

「人間に生まれたら働くのが本能。頭の弱い人は身体で、身体の弱い人は頭で」といい、甘えた現代人にさりげない苦言（くごん）も。そんな黄川田さんのことばに説得力があるのも、「一日一回は働いて汗をかく」という日常を実践しているからこそなのでしょう。

むかしながらの日本の暮らしを伝える伝承館の建物と黄川田巳之助さんのお話。この場所だからこそ素直に感じることが出来る日本の古きよき伝統や心が、ここには確かにあります。

気仙大工・左官伝承館
電話／〇一九二一五六一九二一
休館日／毎週水曜日 観覧料／無料
<http://www.3kujyo-kenko-dous attractions denstokushin.jp/>
JR大船渡線陸前高田駅から車で二五分

秘密のケンミンSHOWでも紹介された おちつき

「大船渡市に住む岩手県民は、披露宴で新郎新婦入場の前に『うどん』と『あんこ餅』を食べる！」とテレビでも紹介された「おちつき」は、気仙地方ではごく一般的な風習です。

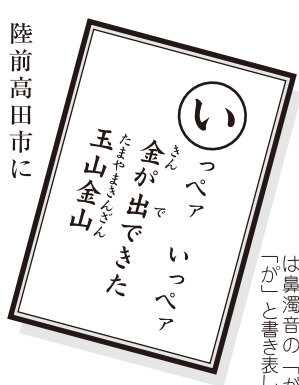


「うどんはツルツル、餅はカメカメ…」などと紹介の枕詞に使われるこの風習は、宴会前に招待者のお腹を落ち着かせる気配りと、新郎新婦が末永く長持ちするようにという両家の願いが込められているといえます。

気仙地方では披露宴の開始から宴会が始まるまで一時間もかかることは普通です。うどんとあんこ餅のお陰で長い挨拶も気にせず「落ち着いて」聞くことができますというわけです。

ケセン語カルタ

気仙地方の方言に誇りを持って「ケセン語」と名付け、文法書や辞典そして聖書まで出版したのは第七号で紹介した山浦玄嗣（やまうら げんじ）さんです。陸前高田青年会議所の会員たちがその山浦さんと一緒にカルタをつくって、子どもたちにケセン語や気仙の歴史を伝える活動をはじめました。今回からはそのカルタを使って、気仙の言葉や歴史のさわりをご紹介します。



※ケセン語の表記では鼻濁音の「が」は「が」と書き表します。



金の俵を運ぶ「べごっこ」（陸前高田市竹駒町）

陸前高田市にある玉山金山の歴史は古く天平年間までさかのぼり、僧行基が諸国行脚の際、夢に弁財天が現れ発見したという伝説が残っています。その後玉山をはじめとする気仙の金は、平泉の中尊寺金色堂の建立や、平重盛が産金千三百両を宋国（今の中国）育王山に寄進するなど、歴史的な働きをしたとされています。

気仙風土記

民俗百話 文・金野静一 絵・庄司暁子



イスパニア人の 気仙探検記

大津波の「もてなし」

慶長十六年（一六一一年）に、三陸海岸一帯に大津波がありました。この年に、気仙で始めて西洋人が渡来してきています。

この西洋人は、イスパニア使節セバスチャン・ビスカイノ氏で、津波の日より一週間前の七月二十二日に仙台に着き、気仙にはいつてから津波に遭遇しています。（中略）

一行の目的は、金銀探索と沿岸測量が主で、（中略）そのときの一行の日記が「大日本史第十二編」に掲載されており、そこで、その日記の気仙に関する部分を要約してみました。（中略）

「火曜日、盛というところに着いた。ここにも大きい湾と良港がある。それをサン・アンドレスと名付けた。（大船渡湾のことであろう）」

木曜日、暴風雨のためこの地に滞在し、金曜日越喜来（おきらい）におもむいた。ところが、この村に着く前に男女がみな山へ向かって逃げのを見た。これまでの土民は、予等の一行を見ようと浜に集まってきたのに、この地方のみ自分達を恐れるというのは、まことに奇異なことだと思った。それはこの日（十月二十八日）一時間ほど続いた大地震があり、そのために海水が二丈二尺余りの高さになって、この地方の家屋田畑等を流没せしめたことが後にわかったのである。

ちょうど、この事実が起こったのは午後五時ごろで、自分たちはその時、海上にあって大きな震動を感じ、後方にあった舟二隻は、これがために沈没の災いにあったが、幸いに自分たちはその難を免れたのである。」

それにしても初めて来た西洋人に對する「もてなし」がものすごい大津波だったのですから、ビスカイノ氏も、さぞびっくりしたことでしょう。

気仙風土記民俗百話は金野静一著「気仙風土記民俗百話」（一九六七、高田活版から抜粋しました）

気仙とともに

[No.08]



「必殺遊び人」は
地域おこしの達人
千田明雄さん

奥州伊達軍
五葉山火縄銃鉄砲隊
大目付



住田町の地域づくりに若いときから深く関わり続けてきた千田明雄さん。現在では本業の工務店経営のかたわら、住田観光開発の社長として、また五葉山火縄銃鉄砲隊の大目付として住田町の地域づくりに関わり続けています。そんな千田さんに、ふるさとに掛ける思いを伺ってみました。

町史に残るまちづくりイベント・種山ケ原の「スターウォッチング」や「無限会社天地人」による地域づくり活動など、千田さんの青春は地域づくりとともにありました。現在は、工務店の経営のかたわら住田観光開発株式会社社長として住田の観光名所・滝観洞や道の駅種山ケ原ぼらん、遊林ランド種山の運営を取り仕切る重責を担っている千田さんですが、いつどのようなきっかけで地域づくりに関わりはじめたのでしょうか。

早起き朝食会が原点に

千田さんは釜石の工業高校を出て一度は町を離れ大手の電気会社に入社しました。その後、父親の工務店を手伝うために帰省。仕事で町役場に足繁く通うようになりました。そんな姿を目にした、現住田町長の多田欣一さんが「若い人のなかでいろいろやっているようだ、まちづくりも何かやってもらえないか」と声をかけたのでした。

最初のころは、「地域づくりを話し合う場づくり」が大事と考え、朝の七時から八時まで、近くの旅館で朝食を食べながら仲間が集まったのだとか。

そんな中で発想したのが、種山ケ原の「スターウォッチング」でした。家屋が少なく人工の光が少ない住田なら、星の光がどこよりきれいなはずと、一



勇ましい鉄砲隊の演武風景



鉄砲隊の総大将は伊達家の宗家



この立派な甲冑も千田さんらの手作り

フィールドを楽しむ

九八八年にはじめてこのイベントは全国的に高い評価を得ましたが、その始まりは地道な早起き会議だったわけです。

現在では県外からも演武の依頼が来る「五葉山火縄銃鉄砲隊」の発端は日本鉄砲史学会に所属する火縄銃研究家との出会いでしたが、背景には伊達藩の火縄の生産地だった五葉地域の歴史がありました。スターウォッチングにしても五葉山火縄銃鉄砲隊の活動にしても、自分の住んでいるフィールドを存分に楽しむという精神が千田さんの原点にあるようです。

みんなで楽しいことを

自身が楽しいこと、みんなが楽しめることを考えるのが得意な千田さんに家族が付けたあだ名が「必殺遊び人」。遊ぶといっても、真剣そのもの。嬉々として活動する千田さんの周りには、自ずと協力者が集まっています。

地域おこしは、生まれ育った五葉地域への恩返しという千田さん。「やりたいうことが次々浮かび、死ぬまでにやりきれない」と笑います。

※演武は「住田町夏まつり」「三陸・大船渡夏まつり」「仙台・青葉まつり」などで見ることが出来ます。詳しくは住田町役場へお問い合わせください。(電話〇一九二-四六二二二)

来て、見、で、け、ら、っ、せ、ん

◆三陸大船渡浜一番まつり

大船渡魚市場を会場に、三陸の海で育った力キをはじめ、アワビや秋サケなど冬の味覚を一堂に集め即売や「ミニ競り市」「力キむき体験」などが行われます。魚市場の活気ある風情を楽しみながら海の幸を食べたり購入したい方にお勧めの楽しいイベントです。



日時／平成22年12月5日(日)
午前9時～午後2時 ※雨天決行
場所／大船渡魚市場
(大船渡市大船渡町字永井沢174番地)
問い合わせ／0192-27-3111

◆三陸鉄道からのお知らせ

三陸鉄道には、お得な切符が色々あります。
「二日フリー乗車券」一日乗り降り自由な切符です。
南リアス線用千両円
北リアス線用千両円
(土曜・日曜・祝日限定 ただし利用日を拡大することがあります。)

これにJR東日本いわてホリデーパス(二千二百円、大人の休日倶楽部会員は千両円)を合わせると、手軽で割安な列車の旅を楽しむことができます。
「三人から半額切符」三名様以上で同一区間をご利用のお客様の運賃が半額になります。
三陸鉄道の最寄り駅で乗車券を購入する場合のみご利用いただけます。ご購入の三日前までに申し込みください。



お問い合わせ／0193-62-8900
http://sanrikutetsudou.com

◆新名物「元祖かき小屋」

昨年オープンし好評の力キ食べ放題「若手大船渡元祖かき小屋」が今シーズンもオープン予定。築地市場で最も評価の高い大船渡湾の力キですが、これまで気軽に食べる場所がありませんでした。「かき小屋」では殻付き力キが四十分食べ放題。お誘い合わせてぜひ一度どうぞ。



岩手大船渡・元祖かき小屋
完全予約制で、土日祝日限定営業
料金／大人 2,500円
子ども 1,000円(小学生以下)
※ご飯付きです
場所／大船渡おさかなセンター
(大船渡市大船渡町字砂子前1-1)
営業期間／1月中旬～4月中旬
お問い合わせ／0192-26-4788

◆十一月二十一日
「米崎ふれあいりんごまつり」が陸前高田市総合農指導センターで行われます。
問い合わせ／0192-55-6234

◆十一月二十三日～二十八日
「三陸の食卓をおすそわけの市inいわて銀河プラザ」が東京銀座のいわて銀河プラザで行われます。
問い合わせ／0192-27-9911

◆十二月十日～十二日
「三陸の食卓をおすそわけの市in川徳」が盛岡市の川徳デパートで行われます。
問い合わせ／0192-27-9911

◆三陸大船渡浜一番まつり

詳しくは上段の記事をご覧ください。
詳しくは上段の記事をご覧ください。

◆元祖かき小屋

詳しくは上段の記事をご覧ください。

◆二〇一一年三月上旬
気仙川のイワナ・ヤマメが解禁します(問い合わせ／気仙川漁協 0192-4613841)

◆二〇一一年三月十九～二十日
「第二十一回全国椿サミット」
詳しくは上段の記事をご覧ください。

陸前高田市のアンテナショップ

首都圏の3カ所で陸前高田市の産品を購入することができます。お近くに来た際にぜひお立ち寄りください。
▶田舎のごっつお
東京都世田谷区用賀4-3-13
電話：03-3700-2810
▶ふるさと美味いもん市場
東京都北区志茂2-40-8
電話：03-6454-4621
▶とれたて大和
神奈川県大和市中央2-1-7
電話：046-240-8340

●新鮮な魚介を浜値で買える人気の「長部港の土曜市」は毎週土曜日午前八時半開催します(問い合わせ／広田湾漁協気仙支所 0192-544-2131)

東京からのアクセス

新幹線ご利用の場合

東京駅から一関駅
一ノ関駅からJR大船渡線で
陸前高田・大船渡へ
東京駅から仙台
仙台駅から高速バスまたは
JR気仙沼線～JR大船渡線で

高速夜行バスご利用の場合

東京池袋西口から23:00発
「けせんライナー」で陸前高田、
大船渡へ明朝7時頃着
(予約は岩手県交通 0193-25-2525)

【編集後記】

◆大船渡地方振興局企画総務部は、平成22年4月に沿岸広域振興局経営企画部大船渡地域振興センターに組織名が変わりました。これからも気仙の魅力を発信し続けてまいりますので、よろしくお願いします。◆さて、今回は少し視点を変えて、観光パンフレットに載っていない「食と観光」にスポットをあてた紙面をお届けします。◆観光地と呼ぶには未熟な面もありますが、地域の人達の熱意と努力に支えられている取組みを集めました。古くは陸の孤島と呼ばれたこの地域だからこそ、守られてきたものがあります。足し算ではなく引き算の魅力に溢れた素材がたくさんあります。そんな魅力を伝えたくて、人との触れあいを何より楽しみに、そして大事に思っている方々を紹介しました。◆ここ気仙を訪れ、ゆっくりとした時間の流れに身をまかせているうちに、いつの間にか明日への力がみなぎっていることでしょう。それは気仙の持つパワーのおすそわけです。気仙の人や言葉、そして自然や食材が持つパワーを感じてみませんか？

R100

本紙は古紙配給率100%再生紙を使用しています

【気仙新聞 第8号 発行:平成22年10月25日】

岩手県気仙地方への移住・定住などのご相談は下記の窓口までお問い合わせください。

- 沿岸広域振興局 大船渡地域振興センター(「気仙新聞」係)
電話 0192-27-9911 http://www.pref.iwate.jp/info.rbz?nd=77&ik=3
- 岩手県の総合窓口「定住・交流サポートセンター」
(岩手県政策地域部地域振興室)
電話 019-629-5194 (直通) http://www.pref.iwate.jp/~uji_turn/
- 首都圏での総合窓口「いわて定住・交流支援センター」
(いわて銀河プラザ Uターンセンター内)
電話 03-3524-8282 http://www.pref.iwate.jp/~hp0401/
- 大船渡市の窓口「企画政策部企画調整課」
電話 0192-27-3111 http://www.city.ofunato.iwate.jp/
- 陸前高田市の窓口「企画部企画政策課」
電話 0192-54-2111 http://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/
- 住田町の窓口「町づくり推進課 移住相談窓口」
電話 0192-46-2114 (直通) http://www.town.sumita.iwate.jp/

ちょこっとプレゼント

読者の皆様から気仙新聞への感想やご意見を募集しています。ハガキまたは封書に「ちょこっとプレゼント応募券」を貼り、住所・年齢・お名前を明記のうえお送りください。抽選のうえ5名様に、「(株)浦嶋商店の冷燗セット」をプレゼントさせていただきます。
(第8号の〆切は 2011年1月31日です)

【応募先】

〒022-8502
岩手県大船渡市猪川町字前田6-1
岩手県沿岸広域振興局
大船渡地域振興センター
「気仙新聞」係

ちょこっとプレゼント
応募券
【気仙新聞第8号】